東京都教育映画コンクール奨励賞　フジフィルム映画技術賞
文部省選定

道ひとすじに

劇映画
白黒/55分
¥ 180,000

—若き日の吉岡弥生—

明治時代——女性には何の権利も与えられなかった男尊女卑の時代に、女性がひとりの人間として男性に互して生きようとすることは、今の私たちが想像する以上に厳しいことだった。

しかし、弥生は医者として生きる道を選んだ。そして、さらに女医を養成する東京女医学校の認立に全力を注ぎ、辛苦の末専門学校として文部省の認可を受け今日の東京女子医科大学の基礎を築いた。

夫君荒太の暖い愛情に包まれ、ひたすらに歩み続ける弥生の姿は、今と時代は異なるとはいえ、私たちに深い感動を与えるだろう。

■ 日本経済新聞評

今の我々には想像できないほど困難な時代に、いばらの道をきりひらいた弥生のけなげな態度は、若い人たちに示唆するものが多いであろうし、年配の人たちは激しい時の流れを今更のように感ずるに違いない。元来この種の伝記は人物を神格化するあまり、非人間的なものになりがちだが、この映画は人間性を強調し、中編ながら苦心のあとがうかがえる。

■ 毎日新聞評

医者としての仕事、高利貸相手の学校経営のやりくり、主婦の役目をこなし、女性の地位の向上を願ってまっしぐらに進んでいく弥生の生き方は今も新しい。ウーマン・パワーが話題になっている今日、女性の生き方を改めて考えさせる素材になりそうだ。

■ 製作スタッフ

製　作	村　山　英　治
	村　山　和　雄
脚　本	谷　　　健　二
演　出	金　子　精　吾
撮　影	村　山　和　雄
照　明	沢　田　　　実
美　術	飯　田　公　夫
音　楽	浜　坂　福　夫

企　画　社会法人 **至　誠　会**
製　作　株式会社 **桜　映　画　社**

あらすじ

明治22年、明治政府はわが国初の憲法を発布。ようやく近代国家としての第一歩を踏み出した。とはいうものの、人々の心には封建的な考え方が根強く残っており、全く男子専制の時代だった。

静岡県下の漢方医の娘として生まれた鷲山弥生は、その年医師になることを決意して上京、済生学舎の門を叩いた。

当時、女子医学生の入学を認めたのはこの済生学舎だけだった。

しかし、ここでも、当時の例にもれず、男性の横暴には目に余るものがあった。多勢の男子学生の中で、女子学生は小さくなっていなければならなかった。男子学生は女子学生を追い回し、揚句の果てには、女子医学生は風紀を乱すという理由で学校から締め出そうとした。

男子学生の数々のいやがらせにもめげず、弥生の猛勉強は続いた。

昼夜を分たぬ勉強の甲斐あって、後期試験に見事合格、弥生は日本で17番目の女医となった。

本郷に鷲山医院を開き、傍、ドイツ留学を志してドイツ語を勉強するため近くの至誠学院に通った。

学院長は吉岡荒太だった。積極的な弥生に比べて、無口で授業以外のことは一言もしゃべらない荒太であったが、いつかふたりは家庭の事情なども話し合える間柄になった。

荒太の弟、松造はそんなふたりを、頃合いと早合点して兄に代って結婚を申し込みに行く。男世帯を切り回している兄を思ってのことだった。

弥生は、父養斎の反対を押し切って、至誠学院を立派なものに育てる約束で結婚を承諾した。当時としては珍しい自由な結婚だった。

鷲山医院は至誠医院と変り、荒太と弥生の生活が始った。

弥生は、貧しい人たちには、薬よりもこの方が効くとお米を分けてやるし、荒太は荒太で、転がり込んで来た寄宿生を引き受けてしまう。苦しい新婚生活だった。

そして遂に、荒太は過労がたたって糖尿病で倒れてしまう。至誠学院は閉鎖の止むなきに至った。

折も折、かって弥生の学んだ済生学舎では、風紀問題で新聞に叩かれて、女子医学生を締め出すことになった。

弥生は校長に、やっと開かれた女性の職業を奪う暴挙であると談判するが、断られ、「私が女子学生を引き取ります」と断言する。

弥生の決意に、荒太は、「私にも生きる希望が湧いた」と快く賛成してくれた。

「女性だけで学べる学校をつくろう。そうすれば私たちが経験したような辛い目にあわずに安心して勉強できる。」

これこそ、明治に生まれ、まっしぐらに女医への道を歩んだ吉岡弥生の生涯の仕事となった。

明治33年、日本に初めて東京女医学校が誕生した。粗末な設備と少ない実験用具。解剖材料にも事欠いた。

実験一つ満足にできない学校で、合格者の出るはずもなかった。寄宿生はひとり減り、ふたり減りしていった。

しかし、弥生はくじけなかった。自分の長男分娩も教材として生徒たちに見せるほど勇敢だった。

こうした弥生の努力が実って、明治41年、ようやく医術開業試験の後期試験合格者が出た。東京女医学校から初めてひとりの女医が誕生した。

時代の風潮は、ようやく女性で職業に就く者が増え、東京女医学校も建増しに次ぐ建増しで発展した。

その中で、吉岡夫妻は、学校経営の上で最大の危機を迎えなければならなかった。それは学制が変って、医術開業試験が廃止され、医学専門学校として認可されなければ、卒業しても医者になる道が閉ざされてしまう、その認可の期限が迫ってきたことである。

弥生は必死だった。弥生を信じて集ってきている三百人の生徒のために、是が非でも認可してもらわなければならなかった。

しかし、女医に対する社会の偏見はまだまだ根強かった。その上、貧しい私立学校のこととて、医学校としての設備はいかにも貧弱だった。

文部省は、弥生が何度かけあっても視察にすら来てくれなかった。

この大きなヤマ場を、弥生は荒太の愛情と励まし、更に生徒たちのひたむきな協力で、見事に切り抜けた。

こうして明治45年、東京女医学校は専門学校として認可を受け、ここに東京女子医学専門学校が誕生した。

株式会社　桜映画社

東京都新宿区西新宿１－22－１　スタンダード・ビル
電　話　03（342）5768代表　〒160

配　給